第56号
2025.3
安心のオンライン医療通訳

medi-way 医療通訳だより

Medi-Way 医療通訳者紹介　Vol.30　　英語担当　Eさん

◆なぜ医療通訳者になった？

大学の頃、通訳者も将来の選択肢の一つでしたが、英文学を研究するために大学院に進学、非常勤講師として英語や英語文学を教えてきました。博士号を取得して暫く経って何か別の事に挑戦したいと思った時、胸にしまいこんでいた思いが蘇り、コミュニティ通訳のボランティアを始めました。その時、医療通訳という分野があることを知り、講座で勉強することに。病院でのボランティア通訳を経て、ご縁がありMedi-Wayの通訳者になりました。

◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

患者さんやご家族のポジティヴな思いが伝わってきた時です。例えば早産で生まれた赤ちゃんが、人工呼吸器をつけていたものの徐々に自分で呼吸ができるようになり、我が子を心配していたご両親に良い結果を伝える通訳をした時、ご両親の安堵と喜びが表情や雰囲気から読み取れて、温かい気持ちになりました。医療現場は生と死が交錯する、時に厳しい場所ではありますが、希望の光が見える場面に遭遇できたことは貴重な体験でした。

◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

講座で勉強した医療基礎知識だけでは全く追いつかない位、日々新しいことが出てくるので、動画を視聴したり、ポッドキャストの医療チャンネルを聞いたり、ウェブサイトで情報を収集したりして勉強しています。耳が空いている時はできる限り英語を聞くようにし、リスニング力・瞬発力を鍛えるためにシャドーイングをしています。また他の通訳者の方のパフォーマンスから、良い表現や対処法、振る舞いを学ぶようにしています。

問 診

日本の病院では看護師や医師によって問診が複数回行われます。繰り返し聞かれるのは何故？と疑問を持つ外国の患者さんも少なくありません。中国では最初の1回だけ聞かれることはあっても日本のように何度も同じことを聞かれることはなく、いつも不思議に思ったという声も。

通訳者たちの各地での経験を聞いてみました。オーストラリアでは、病院の予約はインターネットで行い、その時に同時に問診も済んでしまいます。アルゼンチンでは、大きな総合病院以外は日本のクリニックのようなものはなく、ただアパートの一室で医師一人が診察と薬の処方のみを行う、それが非常に一般的だとのこと。ペルーでも、どの診療科に行きたいかだけを聞かれ、診察室に通された後は医師が長い時間をかけて問診から処方まですべて一人でしてくれるそうです。

問診は診察の基本であり、患者さんを守るために何度も行うのも必要だなと感じます。なんだか他の国の医療安全にも興味が湧いてきますね。

今月のトピックス

「お疲れ様です！」

日本特有の言い回しに対し、通訳する言語に適切な表現が見つからない！という悩みは、どの言語の通訳者にとっても共通なようです。例えば、ビジネスの場で頻繁に耳にする「お疲れ様です」という言葉。患者さんの中には、診察室に入った時や終わって帰る時に、医師に対して日本語で「お疲れ様です！」とにこやかに声をかける方がおられます。日本ではこの言葉、時間を問わず挨拶代わりに使われることがあるので、外国の方は挨拶の言葉だと思い込み、挨拶くらいは日本語で言おうと一生懸命覚えられたのだと思いますが…。言われたほうはちょっと苦笑い、日本語の使い方は難しいですね。外国語を長年勉強してきた通訳者は、そんな患者さんのご苦労にとても共感できます。

「頑張ってください」も日常生活の中でよく使いますが、医師から「出産頑張ってください」と言われた際に、英語通訳者はその時の場面にふさわしいように、「無事の出産をお祈りしています」と訳したそうです。そのまま訳すのが良いのか、どんな表現がぴったりくるのか、即座に考えないといけません。

ネイティブ通訳者が、昔日本に住み始めた頃は、日本語独特の表現でなかなか理解しにくい言葉に度々遭遇し、本当に混乱したよ～とつぶやいていました（笑）。日本では習慣になっているような表現が、外国語に訳す時にはいつも悩みの種というわけです。

株式会社 東和エンジニアリング
東和通訳センター　TEL: 06-6292-8568
□東和通訳センター　〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西4-2-27
e-mail：tic@towaeng.co.jp